国指定史跡

箱根旧街道

西坂

箱根旧街道

箱根旧街道は、江戸時代初めに徳川幕府が整備した東海道の一部です。

三島宿（標高25m）から箱根峠（標高846m）を登り、小田原宿（標高10m）まで下る八里（約32km）の坂道です。この坂道は「箱根の山は天下の険」と歌にも唄われたように、東海道随一の難所といわれました。このうち、三島宿から箱根峠を越え、箱根の関所までの区間を西坂とも呼びます。当初、この箱根旧街道には滑り止めのために竹が敷かれていましたが、延宝8年（1680）に二間幅（約3.6m）で石が敷きつめられて以降、石敷きの道となりました。また当時の街道には、距離の目安となる一里塚が道の両側に築かれていたのですが、箱根旧街道西坂にも山中、笹原、錦田の３ヶ所に一里塚が築かれ、現存しています。このうち、錦田一里塚は、大正11年3月8日に国史跡に指定されました。そして、平成16年10月18日には、西坂と東坂（箱根旧街道の小田原側の区画）の計5.05kmが国史跡に追加指定されました。

箱根旧街道には、様々な人やモノが往来しました。

享保14年（1729）8代将軍徳川吉宗の時代、ベトナムから象がやってきました。船で長崎についた象は、将軍に献上されるため、陸路江戸を目指します。街道にはこの珍しい象を一目見ようと、大勢の人々が集まりました。

5月16日、三島宿に到着した象のために本陣には象色が建てられ、象の好物のかんきつ類やまんじゅう、干草などが用意されたといわれています。翌日、象は険しい箱根西坂をなんとか登りきりますが、さすがにバテてしまい箱根宿に4日も逗留したようです。

幕末の外交に手腕を発揮した勘定奉行の川路聖謨（かわじとしあきら）（1801～1868）は、その著『長崎日記・下田日記』の中で、安政2年（1855）に箱根の坂道を通った時の様子を記しています。

この時期、川路はロシアのプチャーチンと長崎・下田で交渉を行っており、この記述は下田から江戸へ帰る時のものです。それによると、当時の箱根道は大変な悪路であったことが分かります。

ドイツ人医師で博物学者でもあるシーボルト（1796～1866）は、オランダ商館付きの医師として来日しました。著書の『江戸参府紀行』には、1826年（文政9）にオランダ商館長に随行して長崎から江戸へ向かう道中の様子が記されています。

4月8日早朝、箱根を目指して沼津を出発したシーボルトは、西坂で植物採集をし、箱根峠では測量を行うなど、積極的に調査活動を行っています。

箱根旧街道史跡

東海道五十三次之内 三島「朝霧」
（三島市郷土資料館蔵）

東海道五十三次之内 三島
（三島市郷土資料館蔵）

東海道五十三次之内 箱根 峠の境木
（三島市郷土資料館蔵）

富士見平と芭蕉の句碑

この地は富士山を望む絶景の場所だが、季節によっては濃霧がたち込めてその美しい姿が見えなくなることもある。

江戸時代、貞享元年（1684）にこの地を訪れた松尾芭蕉は、霧が深くかかったさまをしぐれに見立てた句を詠んだ。

霧しぐれ
富士を見ぬ日ぞ
面白き

三嶋大社は、伊豆国の一宮として古来から人々の尊崇を受けてきた名社である。

源頼朝をはじめとした有力武将や、東海道を往来する旅人たちにも篤く信仰され、今もなお、多くの参拝者を集めている。

三嶋大社

松並木と錦田一里塚

慶長９年（1604）、徳川幕府は諸国の街道を整備して、その道の両側には松を植えて松並木をつくった。さらに道中の目安として、約４㎞ごとに一里塚も築いている。三島市には、現在、箱根の登り口の約１㎞区間において、330本あまりの松と錦田一里塚が残っており、江戸時代の姿が偲ばれる。

錦田一里塚は大正11年（1922）に国史跡に指定されたが、平成16年には松並木と、この錦田一里塚を含めた区間において、改めて国史跡「箱根旧街道」として追加の指定を受けた。

三島西麓野菜

正月六日
三嶋祭の圖

六地蔵

地蔵菩薩は、人が死後行くという６つの世界、「六道」のそれぞれにおいて人々を救うとされ、「六地蔵」はそれを表している。

市山新田の西端に祀られている「六地蔵」は、２列に６体ずつ並んでおり、さらにもう１体あるのを含めると実際には計13体となる。後列右端の１体には、寛政６年（1794）と刻まれていて製作年を知ることができる。

山中城跡（障子堀）

小田原の北条氏が築いた山城で、天正18年（1590）全国統一を目指す豊臣秀吉に攻められ落城する。昭和９年、国史跡に指定され、三島市では発掘調査の結果をもとに史跡公園として整備した。障子堀、畝堀などに特徴がみられる。

兵糧庫の礎石と復元休憩舎

土橋と木橋複合の橋

宗閑寺

墓 碑

山中城の守備軍副将であった間宮康俊の娘お久が、父をはじめ戦で命を落とした者たちを弔うために建立した寺である。寺域には間宮康俊一族の五輪塔や豊臣方で戦死した一柳伊豆守直末の墓がある。

芝切地蔵尊

昔、山中新田の村はずれにあたるこの地で、旅人が突然の病に罹り亡くなってしまった。旅人は亡くなる前に、看病をしてくれた村人たちに、自分を地蔵尊として祀ってほしいと願った。そして、故郷の常陸国が見えるくらいに芝を積んで供えてくれれば、世の人々を病気から守ると誓った。そこで、村人たちは旅人を手厚く葬り、この場所にお堂を建てたのだという。

それ以来、このお堂の境内に切り取った芝を高く積んで祈ることが行われた。かつては、伊豆一円から富士に至るまで、広く信仰を集めていたという。

山中新田集落の東側、一本杉の根元に盃と徳利を彫った墓があり、通称「雲助徳利の墓」と呼ばれている。この墓の主は松谷久四郎という名の雲助で、仲間の取締りをしたり、東海道筋の百姓を助けたりしていた。困窮者に対しては身銭を切って面倒をみるなどして、人々から厚い信頼を受けていた。久四郎は終生酒を愛したことから、雲助や土地の人々によってこのような形の墓が建てられたという。

雲助徳利の墓

※ 雲助（くもすけ）とは、江戸時代、宿場・渡し場・街道で駕籠かきや荷運びなどをした人足。

発掘された当時の石畳

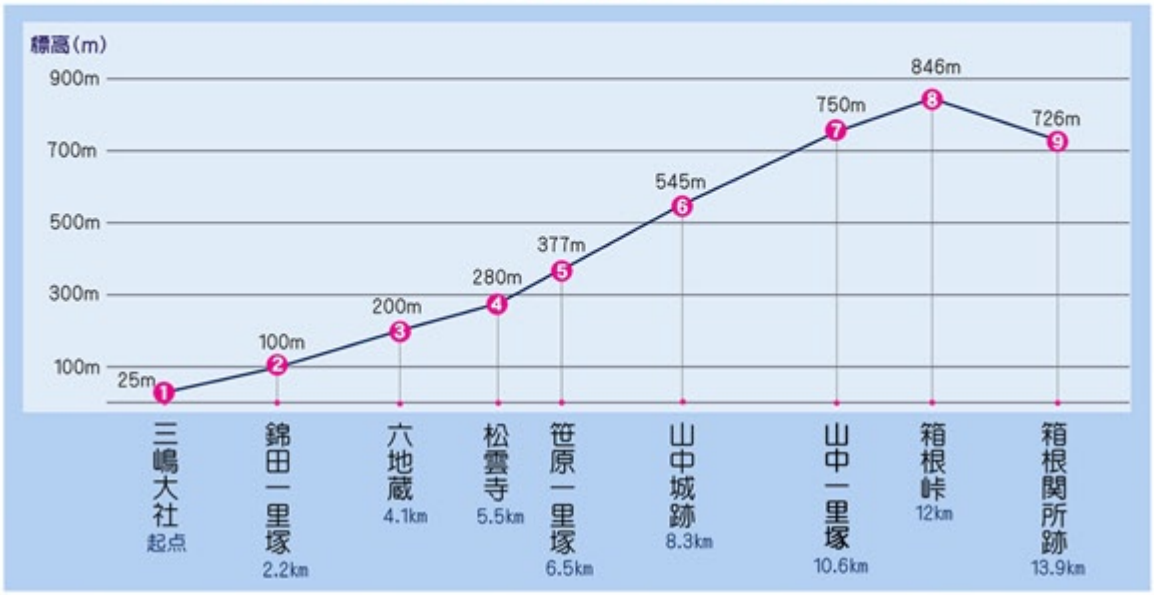
整備後の石畳

接待茶屋跡

接待茶屋跡から出土した遺物

国道を挟んで山中一里塚の向かい側にあった接待茶屋は、江戸時代、険しい箱根を往来する人や重い荷を運ぶ馬のために、湯茶や焚き火、飼葉を施した所で、昭和45年まで続けられた。

三嶋大社から箱根関所跡までの距離と高低差



東海道と三島宿

江戸時代、三島の町は東海道の宿場として賑わいを見せていました。

江戸日本橋を起点に、京都三条大橋までを結ぶ東海道には五十三の宿場がありましたが、三島はこのうちの十一番目です。伊豆一宮である三嶋大社が所在し、南へ下田街道、北へは甲州街道、そして東西に東海道が延びる三島は、交通の要衝として多くの人が行き交いました。

江戸時代になると、武士や公家、庶民の旅行が盛んになり、また、商人による物資の運搬や公的な荷物の輸送も頻繁に行われるようになります。宿場はこのような、旅行者への宿泊施設の提供の場、そして荷物の輸送の中継地としての役割りを担っていました。

旅人の宿泊に関しては、庶民は「旅籠（はたご）」と呼ばれる宿泊施設に泊まりましたが、大名など身分の高い人たちのためには「本陣（ほんじん）」が設けられました。三島には世古家と樋口家が営む二つの本陣があり、当時を知ることのできる資料が残されています。

多くの人・モノが往来した三島宿は、情報や文化の交流も盛んになり発展しました。三島市には、このようなありし日の賑わいを偲ばせる風景が今もなお残されています。

国指定史跡

箱根旧街道　西坂

発行年月日　平成29年９月29日

編集・発行　三島市教育委員会 郷土文化財室

〒411-0035静岡県三島市大宮町一丁目８番38号

TEL 055-983-2672

FAX 055-983-0870

E-mail:bunkazai@city.mishima.shizuoka.jp